



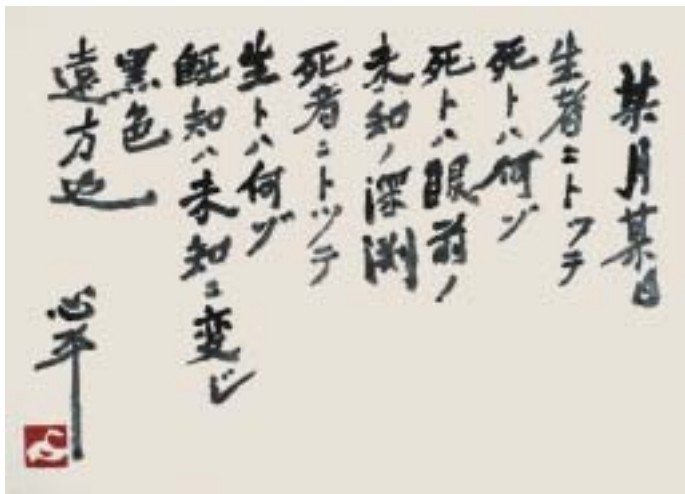
書「自分にとって詩八一種の集中豪雨」



書「龍虎」

草野心平は、詩「書に就いて」のなかで「人間が共に生きる。／その愛しさから。／^{かたじけなく}家が生れた。／それが。／字。」と書いている。磐城中学校時代は美術部に属し、回覧雑誌「文林」に描いた表紙絵の腕前から、心平は将来画家になるものと思われていた。その後、詩人となった心平は、昭和31年、53歳の時、石川達三・川口松太郎・芹沢光治良・田村泰次郎・中島健蔵・丹羽文雄とデッサングループ「竹林会」を結成した。これを機に、心平は再び絵筆を手にするようになる。昭和40年に初めての書と画による個展を開き、以後、日本各地で20回の個展を開いた。また、昭和52年、心平74歳の時には、書の作品を集めた『草野心平之字』を刊行した。

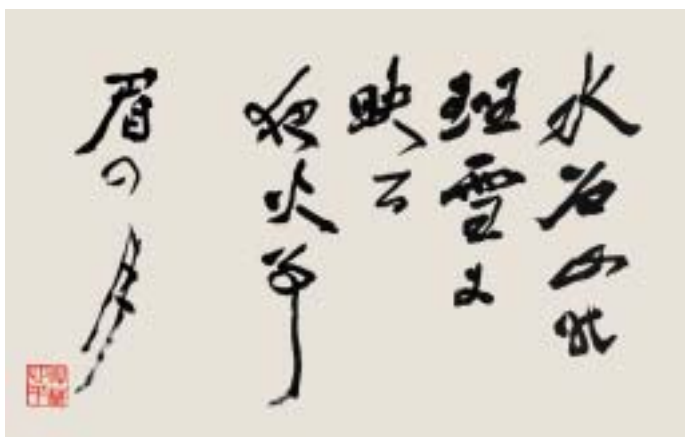
本展では、「富士山」「石」「雲」など、詩のモチーフともなった草野心平の書と画を紹介する。



書「某月某日」



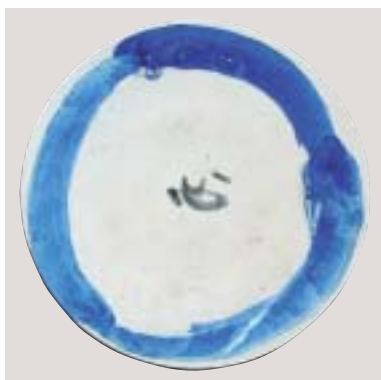
パステル画「グアムの踊り」



書「水石山の斑雪に映る夜火事眉の月」



パステル画「闘牛」



陶皿・絵付「心」



愛用のパレット



愛用の筆壺

